

上野通子著「みちこの心の共育IV—未来・地域・子ども そして、魅力ある、地球、国家へ—」上野みちこ事務所、2013年12月14日刊を読む

グローバル教育とは

イギリスで学んだこと—文化の違いや国民性の違いをいかに理解し合うか—

1. 先日都内の学校を視察し、ちょうど小学校三年生の英語の時間を見学できました。音楽に合わせてあいさつやものの名前を互いに言い合う子どもたちの姿はいきいきとして、本当に英語を体中で楽しんでいましたね。とても良い授業でした。
2. 私が娘たちと住んでいたイギリスの片田舎で、近所の子どもたちが日本の何に興味を持ったかという、まず日本の文化でした。子どもたちから子どもたちへ生活の中で学んできた日本の生活習慣の違いを教えたことで興味を持つ。難しい単語を小学校で教えるよりも、まずは生活から学んでいく。たとえば日本食と洋食の食べ物の違い。ごはんをライスということからでもいいし、「パンでもいろいろな種類、フランスパンとかいろいろあって全部違うんだよ」からでもいい。朝ごはんを食べる前にはなんて言うかとか。「いただきます」なんていう言葉は日本にしかないから、そういう身近な生活文化の違いから教えると、「いただきます」って何で言うのかということにも興味を持つようになるんです。
3. ちょうどいい機会なので日本の文化をまず小さい子どもたちに学ばせる。それは国際比較文化でいいと思うのです。ヨーロッパの文化との違いをわからせながら日本の文化はこうなんだというのを浸透させる。その前提があって、そこに単語として『朝ごはん』というのは英語で『ブレイクファースト』と言うんだよ」というような形で、最初からネイティブの先生が教えるのでなくてもいいと思う。国語の先生でも道德の先生でも家庭科の先生でもいい。そうすると徐々に英語が子どもの世界に入っていくと私は思います。
4. 私の娘たちがイギリスで英語をしゃべれるようになったのは、やはり文化の違いを通してでしたね。学校の授業はちんぷんかんぷんでわからなかったけれど、遊びとか食べ物とか日本とイギリスの違いからいろいろ学びました。
5. 今の日本では宿題は少ないといいますが、イギリスは本当に宿題をたくさん出すのです。単語を一日に百個くらい覚えるんですね。英単語の意味をまず日本語の辞書で引かなければならない。スペリングのテストがあるから毎晩夜中まで勉強しました。よく頑張ったと思う。途中で何度子どもたちが日本に帰りたいと泣いたことか。私は鬼になりましたね。「あなたたちがしっかり英語を学ぶまで私は帰らないよ」と言うと、声を出して泣きますが、子どもはなんでもすぐ覚えてしまう。あっという間に私の英語力を超えて半年後にはネイティブに近い英語をしゃべって、一年後にはクラス委員長をやっていました。
6. そして最初に自信が持てた科目は、音楽と体育なんです。日本にいるときは普通よりできたくらいです。向こうに行って二十五メートルのプールを泳いだ。それだけで拍手をもらって次からヒーローでした。英語が通じなくても遊んでもらえて、体育ができるだけでヒーローです。走るのが速い。ネットボール、ソフトボール、何をやっても運動神経が良かった。これだけすごいい。日本人

ってスポーツができる。日本人を見たことのない人たちの間で日本人というものを背負ったのです。自分たちが。反対に誇りに思って、最初は日本人を知らないところに行って劣等感の塊だったのが、それが自信になって、しかも誇りになった。私たちは日本人だ。それはいいことだった。

7. 音楽もそうです。うちの子はピアノを弾けた。それを神童のように言われた。それが自信になって他の楽器もやるようになって、向こうの先生から勧められてフルートを吹いたりハーブを弾いたりパイプオルガンを弾いたり。ありとあらゆる音楽に興味をもってやりました。楽譜は英語じゃないから読めますよね。体育も「走れ」と言われれば走って、ちゃんと言葉が通じなくてもお互いに通じ合うものはできてくる。
8. これがまさに「グローバル化する」ということではないかと思います。グローバル化は教育を押し付けるというイメージではなくて、文化の違いや国民性の違いをいかに理解し合うか。いいところは褒め合い、違うところは「環境が違うね」と理解し合い、また日本人が優れているところは誇りに思い、直さなければならない点は勉強して直さなければならないと自分で実感する。それができて咀嚼されてはじめてグローバル化した人材育成になるのではないですか。
9. ただ海外に高校や大学から留学させればいいというのでは私はだめだと思います。その前に日本の文化を、日本人のアイデンティティをきちんと植えつけさせて根を張らせて、理解させて、その上で行ったほうがいいと思います。だからグローバル教育というのは英語をやればいいものではないです。ちょこちょこっと文化の違いがわかればいいというものでなくて、もっと深く広い。
10. 日本人の子どもはさまざまな文化の環境の中に生活しながらごく一握りの文化しか知らないのではないのでしょうか。できれば日本の学校教育の中でとことん日本の文化を学べる機会をつくってあげたいですね。うちの子はたまたま海外に行けたので日本の文化を知らなければいけないという思いもあって、茶道、書道、香道、歌舞伎など一生懸命自分で学びましたし、私もいろいろなビデオを見せたり本を読みました。そういう文化はどこかで学んだほうが私はいいと思います。これを知っていると強いと思います。

やりたいことを伸ばす教育

11. 日本の高校受験、大学受験のシステムがある限り、スポーツをしたい子どもたちが伸びません。そこで芽を摘んでしまう。受験勉強でほとんどスポーツを続ける時間がなくなる。これはありえない。今、私は政務官として高校生の達成度テストのあり方と大学入試制度の見直しを PT をつくって検討しているところですが、高校生とか大学生が本当にやりたいことを伸ばせる環境をつくること。そして芽を摘んでしまうのではなくて、専門的に生かせる道をつくっていかなければいけないと思います。オリンピックを目標にしてもいいと思います。専門体育学校に近いものは必要ではないかと思うのです。オリンピックは負けてはだめ、一位を目指す子どもたちをしっかりと育てなくては。それにはスポーツに対する支援を地方でもしなければいけない。地方の子どもたちほど芽を摘まれてしまう。やりたいことを伸ばせる教育をつくっていききたいと思うのです。

P118 ~ 125

[コメント]

私の尊敬する文部科学大臣政務官で、参議院議員の上野通子先生のグローバル教育論。日本の教育行政のトップである文部科学大臣を支える上野先生に期待したい。

— 2014 年 2 月 4 日 林 明夫記 —